

# 「経塚と墳墓」を考える

—京都府北部出土の筒形容器と甕・壺の遺跡を中心に—

杉原和雄

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 「経塚と墳墓」を考える

—京都府北部出土の筒形容器と甕・壺の遺跡を中心に—

杉原和雄

## 1. はじめに

考古学や埋蔵文化財が扱う遺跡の一つに「経塚」と分類される分野があり全国に分布する。経塚研究は石田茂作先生以来、東京・京都・奈良の国立博物館の諸先学、九州については小田富士雄先生を中心に体系化されてきた。経塚は地下に経典を主体として埋めたところとされ、現在のところ平安時代中頃、藤原道長が寛弘4(1007)年に大和金峯山に埋経したのが最古の例とされる。中世を経て近世に至るまで存続するものの願意・意趣あるいは遺跡・遺構のあり方は変化する。関秀夫氏はこれを「埋経の経塚—古代の経塚、納経の経塚—中世の経塚、一石経の経塚—近世の経塚」としてわかりやすく3分類された。<sup>(注1)</sup>

本稿では古代の埋経の遺跡を取り扱うが、この遺跡には地上標識などがいないため不時発見資料が多い。しかし経筒に年紀や人名が記されることがありまた副納品が伴出するため歴史上貴重な情報をもたらしている。筆者は1977年以来、古代の埋経関係遺跡のうち筒形容器と甕・壺類を中心に経塚と墳墓の関係を考えてきた。その主旨等は過去の<sup>(注2)</sup>拙稿に譲るとして、本稿では既に述べたこともある「丹後型埋経遺構または遺跡」と「竹製筒形容器」について若干の検証をしたい。資料は2000～2020年の間に発掘調査された7遺跡・16遺構に1990～1999年に発掘調査された13遺跡、42遺構(拙稿2001)を加えたものを中心とする。なお、本稿は2001年稿の続編である。

## 2. 資料

ここにいう京都府北部とは旧丹後国5郡と旧丹波国北部の2郡に当たる。両丹とも呼ばれ地形や経済的、歴史的にまとまりを持つ。明治初期の旧豊岡県域の名残もあって、但馬を含め三丹地方や北近畿と言われることもあり行政や観光等で連携して活動している。

この20年間(2000～2020)に当該地で発掘調査された遺跡は付表の通りである。銅製経筒の出土はゼロであり稀少品であったことが判る。本稿では遺跡名称は各報告書に従い、また筒形容器の表記は銅製(銅鑄と銅板製)を銅筒、鉄製を鉄筒、土師製を土筒、瓷器系(越前、丹波、常滑、渥美等)の陶製を陶筒、須恵器製を須恵筒、瓦製を瓦筒、竹製を竹筒と記述する。甕と壺についても須恵器は須恵甕、瓷器系は越前甕、常滑壺などとする。筒形容器

付表 近年発掘調査された京都府北部の筒形容器と甕・壺等出土遺跡地名表(2000~2020)  
(遺跡名称は各報告書によった)

郡名	番号	名称	所在地	立地	銅筒・土筒等	筒内の 経典等	伴出品	備考
丹後国								
熊野	①	茶臼ヶ岳	京丹後市久美浜町橋爪	丘陵稜	土筒		倒位の須恵甕、土師蓋	土坑と石組み 凝灰岩の台、土筒と甕を並立
	②	丹波丸山 S X 14	京丹後市峰山町丹波	丘陵腹	なし		須恵甕、鉢	土坑と石組み、中世墓に隣接
中	③	今市	京丹後市大宮町河辺	丘陵端	土筒		須恵甕、土師蓋	土坑内にて並立、甕底部一部打ち欠き
	④	水戸谷 S X 10	京丹後市大宮町水戸谷	丘陵裾	土筒		越前壺は土筒の上位、土師蓋、鍋蓋、土師皿3	土坑と方形石組み、区画墓と連接
与謝	⑤	エノク S X 01	宮津市須津	丘陵端	土筒	なし	土師蓋、銭貨(2)	塚状の一部に集石
		エノク S X 02		丘陵端	なし		倒位の須恵甕、和鏡	土坑と集石、小横穴、台石に赤変部あり
		エノク S X 03		丘陵端	なし		越前壺、土師蓋、土師皿、	土坑と集石、小横穴
		エノク S X 04		丘陵端	なし		倒位の須恵甕	土坑と集石、小横穴、台石に赤変部あり
		エノク S X 05		丘陵端	なし		横位の須恵甕	土坑と集石、小横穴
加佐	⑥	三角1号	舞鶴市下安久	丘陵稜	土筒		土師蓋、銭貨(2)	土坑と集石
		三角2号		丘陵稜	土筒		土師皿	土坑と集石、土筒は石蓋
		三角3号		丘陵稜	なし		鉄釘、鍋(2)、銭貨(5以上)、水晶数珠玉	土坑と集石、小横穴に釘を使用した木箱を推定
		三角4号		丘陵稜	なし		和鏡、鉄短刀、銭貨(30)、越前甕片、土師皿	土坑と集石
	⑦	橋木林 S X 01	舞鶴市多門院	丘陵稜	なし		須恵甕、鉢、土師皿、銭貨(2)	土坑と集石、甕を端へ寄せる、炭化物
		橋木林 S X 02		丘陵稜	なし		なし	土坑と集石
		橋木林 S X 03		丘陵稜	なし		須恵甕片、土師皿、銭貨(8)	土坑

や甕・壺の用途は経筒、経容器(経筒の外容器など)、骨蔵器などが考えられる。

(1)熊野郡

①茶臼ヶ岳<sup>(注3)</sup> 古墳上に、長径1.3mの楕円形の浅い土坑を設け、壁に寄せて倒位の須恵甕と土筒を並置する。台石の中央には凹みがある。土筒は身高26.6cm、平均的な高さでこの種の中では端正な作りである。甕は軟質の東播系で、13世前半の所産であろう。同じ凝灰岩の板石で石組みをした土師製外筒に銅筒を納入する遺構が北方約5kmの久美浜・天王山B経塚にも在る。共に当地の同じ有力者による造営であろう。

(2)中郡

②丹波丸山 S X 14<sup>(注4)</sup> 2019年に調査された最新の例で、不正円形の土坑を設けほぼ中央に須恵器片口で蓋をした須恵甕が置かれていた。東播系の甕と片口鉢と思われる。隣接して中世墓が営まれているのでこの甕も骨蔵器である可能性がある。

③<sup>(注5)</sup>今市 古墳頂部に単独で営まれすぐ南方に式内大宮売神社がある。不正形土坑に土師器で蓋をした須恵甕と口径の大きい土筒を並立して置いている。①茶臼ヶ岳と酷似する遺構・遺物である。土筒は一段低く据えられ、甕は底部を意図的にうち欠いている。この甕は外面に格子目の叩き目、内面を刷毛目で仕上げしており、茶臼ヶ岳や⑤エノクにも見られるが類例は少ない。神出古窯等東播系の甕は外面を条線状叩き、内面をなで仕上げするので格子目叩きの本例は異質で香川県の十瓶山古窯の製品かもしれない。13世紀前半の年代が与えられる。

④<sup>(注6)</sup>水戸谷 S X 10 眺望の開けない谷奥の丘陵裾に、東西約20mに渡って集石が組まれ10数基の配石墓からなる。中央の方形区画内の隅から下部に土筒、上部に越前壺が重なって出土した。土器群は13世紀後半と考えるが、この遺構は接続する中世墓と同じ配石や浅い埋納坑が似ており一連の埋葬遺構とするのが自然であろう。16世紀まで続く典型的な中世墓といえよう。

### (3)与謝郡

⑤<sup>(注7)</sup>エノク S X 01~05 阿蘇海に面した標高50mの丘陵先端部に在る。長径約5m、高さ0.35mのマウンドの内部に4基の円形土坑がある。マウンドの表層から土筒1個が出土した。いずれの土坑の壁面にも形状は異なるが小横穴を設け越前三耳壺と須恵甕を計3個納めている。台石の上に甕を倒位に置くものが2基ある。甕の年代には13世紀初頭から中頃の幅があるが遺構の形態は全く同一、保守的で変化がない、おそらく有力な在地一族の手によるものであろう。調査者は甕・壺内には竹筒等を入れたと想定し4基の経塚と塚1基としているが、地表に近い礫積み内に置いた土筒はその浅さから骨蔵器と考える事もできる。空洞の土筒と甕・壺が集合する興味深い遺構である。福井県小浜市・田烏元山、兵庫県朝来市・一乗寺でも数基の埋経等の遺構を集石、土盛りで覆う例があるものの類例は少ない。

### (4)加佐郡

⑥<sup>(注8)</sup>三角 1~4号 舞鶴湾を望む丘陵上に位置する。1号は径50cmの小さな土坑の壁に寄せて土筒を安置、内部に銭貨2枚があった。2号も壁寄りに土筒を置き周囲に礫を置いていた。3号は土坑に礫を入れさらに北壁に小横穴を設けていたが小横穴内には鉄釘2本が認められたのみであった。4号は長方形土坑の片方に浅い土坑があり短刀、和鏡と撒かれたような銭貨30数枚が出土した。調査者はここに木箱の存在を想定している。他に瓦器鍋片、銭貨5枚、水晶製数珠玉1個が出土した。報告者が経塚と判断する4基の年代は13世紀前半か。

⑦<sup>(注9)</sup>橋木林 S X 01~03 祖母谷川上流の独立丘陵上に位置し近辺に平安時代後期の創



1 権現山 2 大道寺 3 私市円山 4 山形 5 豊谷 6 天王山  
 7 別荘 8 谷垣 9 大田南 10 通り 11 左坂 12 幾坂 13 成相寺  
 14 仲仙 15 天台南谷 16 高田山 17 茶臼ヶ岳 18 丹波丸山 19 今市  
 20 水戸谷 21 エノク 22 三角 23 橋木林  
 調査年次 1～3 1981～1989 4～16 1990～1999  
 17～23 2000～2020(本稿付表)

第1図 京都府北部の発掘調査された筒形容器と  
 甕・壺等出土遺跡位置図

建と伝わる興善寺がある。遺構はやせ尾根上に一直線に並ぶ。楕円形土坑の西壁に寄せた須恵甕と浮いた集石があるものと土坑に簡素な石組みをしているが遺物等はないものがある。S X03は長方形土坑で坑底から銭貨8枚と13世紀前半の土師皿が、埋土から須恵甕の口縁部破片が出土している。長方形土坑は墓の土壌を思わせる。二つの甕は13世紀初頭のもので外面を叩き調整、内面を刷毛目調整して、灰白色、軟質である。調査者は造営主体を興善寺の僧侶や荘園の管理者と見ておられるが同感である。

以上、2000—2020年に調査

された7遺跡16遺構についてその概要を見てきた。各報告書ではいずれもいわゆる経塚として扱われている。20年間で発掘例が7ヶ所に過ぎないのは開発に伴う調査が激減している事も一因かも知れないが、埋経等の遺跡が他の遺跡に較べて絶対数が少ないという事でもあろう。天田、何鹿2群はゼロであった。須恵甕や越前甕・壺だけで構成されている遺構が目立ち、土筒、甕等を小横穴内または壁際に寄せて埋置するのはエノク、三角、橋木林の6遺構で、他の10遺構は不正形な土坑を掘り集石または簡単な石組みをして容器を納めている。丹後型埋経遺構が6割を占めるのはこれが地域色の濃い遺構だからである。各報告書では空洞の土筒、甕・壺には竹製または木製の経筒が収められていたが腐蝕して残っていないと想定し全てを埋経遺構としている。また倒立した甕に焼骨は納められないので経筒を納めたはずとの記述もあるが、他遺跡で倒立した甕・壺に焼骨を取めた例がありこれをもって倒位の甕を経容器とすることは難しい。紙や布で焼骨を包めば倒位の甕でも納められるしそのまま直葬する場合もある。中世墓と隣接する丹波丸山や水戸谷の甕

と土筒は骨蔵器である可能性が高い。特に水戸谷では方形区画の列石内に納められているのは遺構的にも墓地的要素が強い。三角、橋木林の長方形土坑は円形から方形に向かう中世的墓壇に近づいている。今市の底をうち欠いた甕も仮器化した骨蔵器であろう。この7遺跡の容器や遺構から造営年代は13世紀前半を中心とする時期と考えられるが、丹後地域の中世墓地や埋経等の遺跡を考える上で貴重な情報を提供する。



写真1 久美浜・豊谷 丹後型埋経遺構群(注10による)

### 3. 「丹後型埋経遺構または遺跡」について

京都府北部では1981年以降に発掘調査され、筒形容器、甕・壺が出土した23遺跡の全てに不正形な円形土坑と集石がある。埋納容器が単数、複数にかかわらず掘形の大きさも深さもさほど差異はなく簡素で単純な遺構である。ところがその中に、土坑の壁に小横穴を穿ち内部に石組み等をして筒形容器や甕・壺を埋置する一群があり筆者はこれを前稿2001で「丹後型埋経遺構または遺跡」とした。平面では大小二つの土坑の組み合わせに見えるが基本的には全体が一つの土坑で大きい方を主土坑と呼称している。

この遺構は1981年に但馬・田多地、丹後・権現山でほぼ同時に発掘調査された。両地域で埋経遺跡が発掘調査された初例でもある。丹後にはこの遺構が久美浜・権現山・豊谷・天王山A、弥栄・大田南、大宮・幾坂・左坂・通り、宮津・エノク、舞鶴・三角・天台南谷、福知山・高田山・大道寺、綾部・私市円山の13遺跡がある。発掘調査された埋経関係遺跡全体23件の6割近くを占め丹後に広く普及していたことがわかる。但馬では出石・田多地、浜坂・井ノ谷、和田山・一乗寺、香住・門谷の4遺跡〔旧町名〕があり遺構の形態は丹後と酷似する。土坑の壁面に寄せて埋納する大田南、天台南谷、高田山等の9遺構も同類だろう。いずれもその造営の年代は13世紀前半が盛期である。

丹後型埋経遺構の小横穴内に外容器の土筒に銅筒を納めた左坂、天台、甕内に銅筒と竹筒を納めた大道寺、外容器なしで鉄・銅筒を埋納する権現山と私市円山の三形態がある。しかし小横穴内に土筒または甕・壺を単数または複数を直接埋納する例が一番多い。但馬での3遺跡は銅筒、土筒、甕をそれぞれ直納する。丹後とも共通で小横穴の埋納に特別な方法はなさそうである。主土坑には土筒や甕等を置く例もあるが、礫を埋め、銭貨や土師





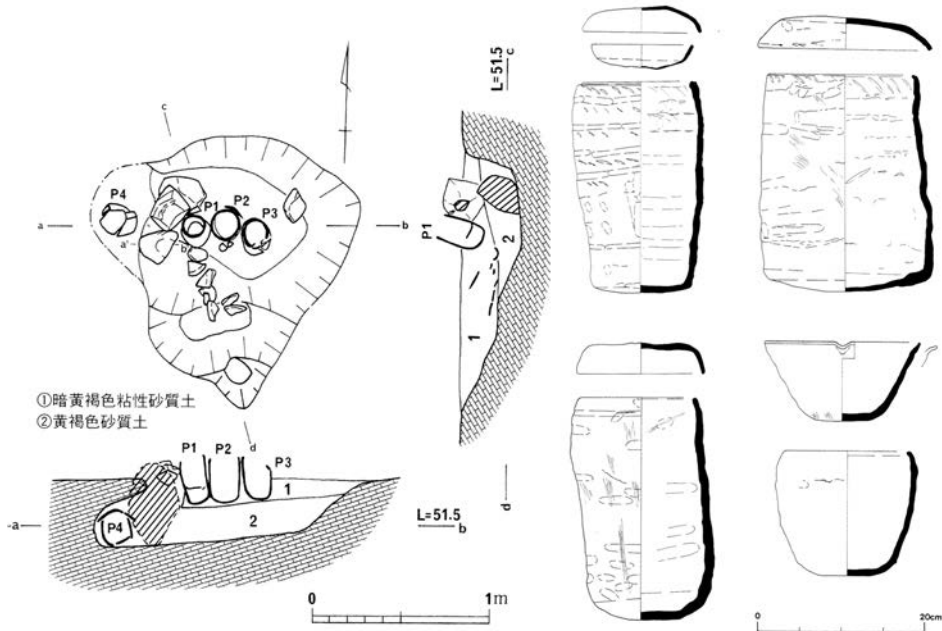
写真2 宮津・エノケ 丹後型埋経遺構

皿を中心に鏡、短刀、青白磁等々が置かれる場合がある。

小横穴内に銅製や竹製の筒形容器を納める例が5、6件ある事実はこれが埋経遺構である蓋然性は高い。一方、両丹12遺跡、但馬2遺跡の小横穴状遺構の合計30基では経筒の埋納が確認できずに空洞状態の土筒、甕等が納置されているものが大半である。

報告書等ではこれらには内部に竹製経筒を想定し埋経遺構とする見解が多い。竹製経筒の現物が奇跡的に残った福知山・大道寺・高田山経塚で出土している以上、その想定は可能である。

筆者はかねてから土筒や甕には竹筒を納入した可能性もあれば火葬骨を入れる場合もあると考えてきた。小横穴が埋経または埋葬空間であり主土坑には副納品や副葬品、または火葬骨を直葬ないし骨蔵器を納める空間として機能したのではないかと推定している。主土坑に埋葬がある場合は小横穴内の経筒は副葬経となる。火葬骨は土葬に較べれば遺存しやすいがだからといって全てが残るわけではない。丹後型埋経遺跡は多目的な遺構であり



第2図 弥栄・大田南 丹後型埋経遺構と土筒4口(弥栄町・峰山町教育委員会1998による)

発掘状況に応じて判断していく必要がある。このタイプの遺構・遺跡は京都府北部を象徴する遺跡として関心が高く肥後弘幸、森島康雄、松本達也、森内秀造<sup>(注10)</sup>氏が分析、検討され、主土坑の空間は小横穴内に納めた經典に対する経塚供養の場とする貴重な意見も出されていて、いまま検証が進んでいる。詳しくは各氏の論考に譲りたい。



写真3 福知山・高田山 中世墓の骨蔵器等

なお福井県小浜市田烏元山の報告書<sup>(注11)</sup>は埋経遺跡に画期的な成果をもたらした御嶽貞義・村上雅紀氏が丹後型埋経遺跡についても考察されている。ここでは6号経塚の土坑壁に小横穴を設け瓦質鍋で蓋をした常滑甕の縦半分程度を納めている。確かに丹後の小横穴構造に似ており壁面への堀込がやや浅いという難点はあるものの作業的には同じでこの種の遺構の分布が広がる可能性もある。

#### 4. 竹製筒形容器

1981年に福知山市大道寺で2口の竹筒、1991年に同じ福知山・高田山で竹筒3口に塗布された漆皮膜が発掘調査で検出された。文献でしか知られていなかった竹製経筒の現物が出土したとして経塚研究の世界に衝撃を与えた。大道寺と高田山は由良川を挟んで3.5 kmの距離、余談だが1986年には卑弥呼の鏡に一石を投じた景初四年銘鏡の出土地は大道寺から東へ2 kmの所にある。福知山盆地は希有な考古資料が再々出る所である。

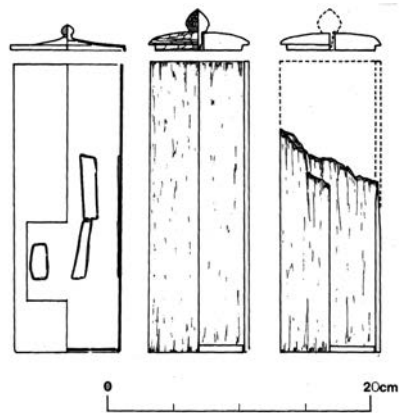
大道寺では土坑内の小横穴に納められていた須恵甕内から銅製経筒と共に水に浸った状態で竹筒と木製の蓋・底が出土、隣接して中世墓がある。銅筒にはローソク状に固結した法華経8巻と阿弥陀経<sup>(注12)</sup>1巻が内蔵されていたが紀年等はなかった。土中での条件がよほど良くなければ出会えない稀少な遺物である。竹筒内には經典の痕跡はなくこれが経筒として用いられたというのは推測であり、納骨容器であった可能性も否定は出来ない。この場合、甕を外容器とした経筒(副葬経)と骨蔵器の組み合わせになる。

高田山には接近した4つの土坑と集石があり、SX1に甕・土筒2、SX2に土筒2、SX3に土筒2、SX4に甕口縁があった。SX1の甕と土筒には火葬骨が、SX2の土筒2口の内部に木製の蓋3個と漆膜が残され竹筒3口が納められていたと推定された。この竹筒痕跡に紙片等は伴っていない。高田山も大道寺も須恵甕の型式から13世紀初頭前後





写真4 福知山・大道寺 銅製経筒と竹筒2口出土状態



第3図 同左 銅製経筒と竹筒2口

のものであろう。

竹製経筒については周知のように『兵範記』久寿2(1155)年5月20日条に骨壺の周囲に阿弥陀経数百卷を竹筒に納めて副葬したとの記述があり、また嘉禎2(1236)年の『如法経現修作法記』に如法経を納めるのに銅筒または竹筒を用いるとある。奈良興福寺や京都聖護院の仏像の胎内に11世紀末から12世紀半ばの竹製経筒が存在することも知られているし、奈良・唐招提寺の證玄塔<sup>(注14)</sup>とされる石造五輪塔の基壇下に銅製円筒形骨壺と脇に竹製経筒が遺存していた。銘文から證玄は正応5(1292)年没とわかる。また奈良県の元興寺極楽坊<sup>(注15)</sup>や当麻寺等では竹製納骨器が多数見られ年紀のわかる最古例は鎌倉中期の正応2(1289)であるが納骨自体は鎌倉前期にさかのぼる可能性があるといわれている。これら竹筒の底は竹節、蓋は木や紙を用いている。いずれにせよ竹製容器の使用は寺院等では経筒または納骨用として多用された事は想像に難くない。出土品としては秋田県男鹿市・加茂青砂経塚<sup>(注16)</sup>で口頸部をうち欠いた壺に竹筒が遺存していたとの指摘がある。三宅敏之氏は1972年発表の誌上<sup>(注17)</sup>で文献上の竹製経筒を紹介され「精密な発掘で注意を怠らなければ竹製経筒が検出される可能性は高い」と述べられていた。さすがである。

ところで竹筒が埋経遺跡に多用されたかどうかは疑問である。遺存しにくく出土例が少ないからだけではない。地下に埋納し経典を保護するには最も適さない材質であり「弥勒値遇」を願う意識が強い造営者は積極的に使用することはなく、地中での経典保存を強く希求していた11、12世紀前半の埋経遺跡では多用しなかったのではないだろうか。鎌倉時代に入り墓地を営む階層が広がると共に高価な銅製や陶製容器の入手が難しい人々が竹製や木製容器を埋経・納骨に多用するようになるのかも知れない。大道寺、高田山遺跡は竹筒使用の古例として貴重であるが、いずれも鎌倉時代に入る13世紀前半ごろの遺跡であり

そのあたりの事情を反映している可能性がある。

筒形容器や甕・壺等が空洞で出土した場合に竹製経筒が内蔵されていたと推定しその遺構を埋経遺構・遺跡と即断するにはまだ慎重な判断が必要だろう。大道寺、高田山で竹筒が出土して以来、発掘調査報告書や研究書で「埋経遺構に空洞の容器が多く見られるのは竹製経筒を使用していたから」との説明文が多くなった。これで経容器の空洞問題は解決できたとの論調になっているが、それでは研究思考の停止に陥らないだろうか。あえて言えば出土した竹筒に経典が残っていた例はなくまた空洞の諸容器に経典や紙片が残されていた事例も殆どない。竹筒が納骨容器として普及している事から見ても骨蔵器として使用された可能性は強い。火葬は土葬に較べれば遺骨が残りやすいが、埋まっている地層などの環境に左右され残らない場合も多い。土筒、竹筒、甕、壺などに経典や火葬骨が残されていないことを持って経容器や骨蔵器ではないとは断言できないだろう。

京都府北部の76遺跡・133遺構のうち、銅製経筒の外容器と焼骨を内蔵して明らかに骨蔵器であるものを除いた土筒約165個、甕・壺約50個は殆どが空洞で検出されている。合わせて215個の空洞容器の全てに竹製経筒が収められ埋経されていたとは思えない。丹後地域でそこまで書写経典を埋納する信仰が普及していたとは思えないがどうであろうか。もちろん竹筒に経典を入れたと推定出来る遺構は今後も事例を増すだろうが、同じように竹筒に火葬骨を入れた遺構も見つかるだろう。他府県でも竹筒が使用されたのは間違いのないであろうが、どの程度使われたかは現状では不明である。木製経筒については触れなかったが、高野山奥の院では曲物、秋田県遊佐町金保<sup>(注18)</sup>経塚では桐製の実物が出土している。奈良県・室生寺二重石層塔内部からは内に経軸を残した木製経筒の有品が残されていた。竹筒と同じように寺院で多用されてきただろう。

## 5. 埋経遺跡（経塚）と墳墓

埋経遺跡と墳墓は礫を多く使う遺構、副納品・副葬品の種類、筒形容器、甕、壺、鉢、鍋等の容器の種類、材質、倒位の使用方法などいずれをとっても似ている。両者の類似性については多くの先学も言及されているが、その遺構を正面から取り上げた鎌田勉氏の優れた論考<sup>(注19)</sup>がある。一般に12世紀後半以降、埋経遺跡に追善供養の願意が普及すると同時に中世的墳墓が始まり、13世紀以降の遺構に方形土坑や方形区画の列石などが広く見られるようになる。また中世墓は地上に出る部分も多く比較的浅いところで見つかる遺構が多いことや仮器化するために容器の一部を意図的に欠くことなども墳墓的要素として一つの目安になるだろう。石塔類など標識を立てるのも墳墓的であろう。平安時代末期に描かれたと言われる「餓鬼草紙」には円形盛り土型から方形積み石型へ変化する墳墓が描かれてい

る。埋骨は方形区画等の構造物が地表から見えるように行われるが、埋経は不正形な円形土坑を掘りさらに磔を用いて遺構を隠すように構築するのが原則である。

京都府北部では丹後の水戸谷・福井・地蔵山・成相寺、他府県では滋賀県・日野大谷、三重県・横尾・伊勢朝熊山などで方形区画の配石を行い、一部では盛り土のマウンドが見られ、多数の骨蔵器と共に火葬骨が納められた土筒がある。天台南谷では方形掘形に4基の埋葬遺構があると判断されているし、高田山では方形掘形内から火葬骨を納めた土筒2個と甕が出土し、接して竹筒を伴う遺構がある。但馬でも八鹿町宿南・比丘尼経塚では土筒に「綾部桓吉」の刻銘があり埋経と埋骨が組み合わされた遺構がある。また土筒は大宮・水戸谷、宮津・成相寺、加悦・西光寺裏山、野田川・地蔵山等々明らかに中世墓地内でも確認され、久美浜・別荘、大道寺等では土筒内に火葬骨が残っている。また13世紀代に入ると丹後でも甕や壺に火葬骨が納められ底部を欠いて仮器化した甕も見受けられる。

京都府北部の土筒約160口は他地域に較べて圧倒的に多いが規格性に欠け優品が少ない。これは土師製筒形容器を経容器としてだけでなく骨蔵器としても使用したことが要因と考えられる。ちなみに平安京周辺では陶製を、播磨では須恵製を経容器として多用する。但馬では土筒と須恵製甕が中心である。このように筒形容器には地域色がよく現れる。

丹後地域では、平安時代の墳墓は少なく前期では刀、石帯などを副葬した弥栄・御殿口古墓が確認されているくらいで、あとは後期に古墳時代の横穴式石室や横穴墓を再利用して埋葬した例が知られる程度である。鎌倉時代では久美浜・日光寺の土葬墓に青磁椀が副葬されていたがいわゆる中世墓の資料は少ない。従って埋経遺跡といわれる遺跡に中世墳墓が混在してその穴を埋めるとする見方はあながち否定されるものではない。また天台南谷、豊谷、但馬一乗寺・新宮、福井県敦賀市深山寺・小浜市田烏元山等々は10基前後からなる遺構の集合であり、筒形容器や甕を伴う13世紀前半を中心とする遺跡である。これらは個人・家族墓から集団墓へ移行する初期の集団墓でもあるだろう。平清盛の平家納経はつとに知られているが、埋経は武士層にさほど普及しなかったように思われる。鎌倉時代以降、埋葬や追善行為は武士の一族、僧侶が中心になり盛んになっていく。中世墓の造営は一部の階層だけで、自然葬、放置葬的なもので埋葬される人々はおお多かつたと考えられる。庶民層にとって土筒・竹筒は陶製に較べれば入手し易かつたかも知れないが内部に入れる書写経典や火葬の普及度を考えると中世前期に竹筒等の筒形容器が多用されることはおそらくなかつただろう。古代・中世の埋経や埋葬の造営主体は貴族、官人、僧侶、武士等が中心でそれに有力な名主クラスが加わる程度であつた考えられる。

西口圭介氏は近畿地方では11世紀後半～12世紀前半には土葬墓・火葬墓共に墓地の形成が殆ど見られない墓地の空白期とされ、12世紀後半～13世紀前半に近畿全体で土葬、火葬

の共同墓地が形成し始めると述べておられる。<sup>(注20)</sup>丹後では特に12世紀末以降の埋経等関係遺跡が多く、遺構と墳墓が混在しており時期的にも遺構的にも中世的性格を持っている。丹後の土筒は集合して出土する傾向があり、埋経と埋葬の遺構が混在した中世集団墓のさきがけ、または初期中世墓への過渡的な位置づけができると考えられる。

## 6. おわりに

京都府北部は低丘陵地に多くの埋経遺跡や筒形容器出土遺跡が築かれ近畿でも注目すべき地域である。1981年に偶然、久美浜・権現山、但馬・田多地でこの地域では戦後初めてと言っても良い埋経遺跡が同時に発掘調査された。しかも経筒はいずれも土坑内の壁に小横穴を設けそこに安置するという共通した遺構で地方色が濃く、後に丹後型埋経遺跡と呼ばれることになった。その後2020年までに筒形容器を出土する23件の発掘調査が実施され、今日では過去の不時発見資料も含め76件の埋経遺跡等、133件の遺構を把握できるまでになった。特に埋納容器として165個の土筒出土があり土筒を多用した事がこの地域の最大の特徴であろう。埋経容器の一つと考えられる銅製経筒は27口、鉄製経筒は3口である。久美浜・円頓寺の山の神は嘉応2(1170)年、宮津・籠神社は文治4・5(1188・1189)年の紀年銘を持つが与謝野・男山、綾部・藤山と並んでおそらくこの地域でもっとも古いグループと思われる。他の多くの土筒や丹後型埋経遺跡等は12世紀末から13世紀前半の造営で中世墓と重なってくる。また平家から源氏へ政権が移行し武士が台頭する時期であり、激動の政治・社会情勢下の遺跡でもあると云えよう。

以上、不勉強で過去の拙稿を出るものではなかったがこの20年間に発掘調査された7ヶ所の筒形容器出土遺跡を見て考えると述べてきた。以下にまとめておきたい。

1、経塚と言われる遺跡は意外と複雑なものであり殆どが複合的遺跡である。2、丹後型埋経遺跡は地域性が濃く、埋経と埋葬の遺構・遺物が絡み合う。3、銅筒だけでなく土筒、竹筒や木筒、甕・壺も埋経や埋骨に使用されたと考えられる。4、埋経遺跡には骨蔵器に対応する副葬経の場合もある。5、丹後型土師製筒形容器は他地域に較べて圧倒的に多いがこれは経容器としてだけでなく骨蔵器としても使用されたからと考えられる。6、空洞で検出される土筒、甕・壺の内部には必ずしも竹製経筒が入るのではなく火葬骨がある場合も想定しておく必要がある。7、丹後では埋経関係遺跡は埋経と埋葬が混在し信仰だけでなく墓制の変遷とも関係して中世集団墓のさきがけと位置づけられるかも知れない。

森内秀造氏は但馬・丹後の銅製経筒を中心とした経塚についての的を射る分類や性格を論じておられ、<sup>(注21)</sup>村木二郎氏は三丹の経塚としての的確な分析を公表されている。<sup>(注22)</sup>丹後地域の埋経遺跡研究に有益である。また丹後・但馬では研究会員が協力して中世土器と経塚・古墓

について発表会と共に綿密な資料集<sup>(注23)</sup>を刊行された。中世墓資料集成研究会は10～16世紀の中世墓を網羅した資料<sup>(注24)</sup>(近畿編)を2006年に刊行している。国立歴史民俗博物館は経塚データベース調査カードに写真と実測図を添付した情報集<sup>(注25)</sup>作成作業を全国的に実施し研究会も行った。経塚研究にとって大規模で画期的な調査事業であり今後の資料の公開と活用が期待される。これらの集成作業には部分的に参加させていただき多くのことを学ばせていただいた。集成に当たられた方々に心から感謝したい。

なお各府県が経塚資料の集成を進めている中、京都府では全域に渡る埋経(経塚)遺跡等関係資料を集成して1冊の資料集として刊行されたことは未だに無い。京都府の経塚に関心を持ってきた筆者として責任を感じるとともに今後の課題<sup>(注26)</sup>としたい。

全国に見られる埋経遺跡等は地域色も濃く多種多様である。小田富士雄氏も「掘ってみないと経塚か墓かは不明」といわれている。いわゆる経塚や墳墓の遺跡は中世仏教文化を研究する上で貴重な情報を提供すると考えられる。その研究は詰まるところ一つ一つの遺跡、遺構・遺物を地道に検証する作業が求められているものと考えている。

本稿を作成するに際しては長岡京市埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、梅本康広氏等には資料収集で直接お世話になり、当調査研究センター肥後弘幸次長には資料提供・作成に助力していただくと共に本論集への参加・執筆に強い誘導をいただいた。皆様に心からお礼を申し上げ、あわせて先学や各遺跡の報告者に感謝したい。なお、写真2～4と第3図は当調査研究センターから提供いただいた。

(すぎはら・かずお=向日市埋蔵文化財センター理事長)

注1 関 秀夫1990『経塚とその遺物 日本の美術』第292号 至文堂

注2 京都府立丹後郷土資料館(担当杉原)1977『経塚 丹後とその周辺』

拙稿を以下に記す。

杉原和雄1981「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」『史想』第19号 京都教育大学考古学研究会

杉原和雄1987「経塚遺構と古墓」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

杉原和雄1989「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について—」『考古学雑誌』第74巻第4号 日本考古学会

杉原和雄1991「京都府綾部市所在の「永久二年銘石碑について—資料的価値の再検討」『史迹と美術』第619号 史迹美術同巧会

杉原和雄2001「近年調査された京都府北部出土の土師製筒形容器とその遺跡について—経塚と墳墓を考える—」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注3 黒坪一樹ほか2009「茶臼ヶ岳古墳群発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター



- 注4 名村威彦2020「令和元年度発掘調査略報 丹波丸山古墳群第4次」『京都府埋蔵文化財情報』第137号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注5 橋本勝行2001『今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報』大宮町文化財調査報告第19集 大宮町教育委員会
- 注6 橋本勝行2004『水戸谷遺跡発掘調査概報』大宮町文化財調査報告第22集 大宮町教育委員会
- 注7 岩松保2001「エノク経塚」(『京都府遺跡調査概報第』98冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注8 伊野近富、田代 弘2005「三角古墳群第2次」『京都府遺跡調査概報』第115冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注9 中島史子2001「橋木林遺跡」『京都府遺跡調査概報第』96冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注10 肥後弘幸1992「豊谷遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』京都府教育委員会、森島康雄  
1996「京都府における銭貨を伴う経塚」『出土銭貨』第6号 出土銭貨研究会、松本達也2001  
「中丹波の経塚と古墓」『中世土器と経塚・古墓』第19回両丹考古学研究会・但馬考古学研究会  
交流会、森内秀造2003「兵庫の経塚の概要とその特徴」国立歴史民俗博物館 経塚データ  
ベース研究会議
- 注11 村上雅紀2003「福井県嶺南地域における埋経遺跡の様相について」(御嶽貞義ほか2003「田  
鳥元山古遺跡」『福井県埋蔵文化財調査報告』第67集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
所収)
- 注12 難波田徹1983「大道寺経塚出土埋納紙本経の保存修理とその意義」(『京都府遺跡調査報告書』  
第1冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター所収)
- 注13 小池寛2001「竹製経筒の復元について-漆を塗布した竹製経筒の新例-」『京都府埋蔵文化  
財情報』第52号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注14 奈良六大寺大観刊行会1972『奈良六大寺大観』第13巻 唐招提寺 二
- 注15 元興寺・元興寺文化財研究所1986『中世庶民信仰資料』
- 注16 吉岡康暢1985「経容器から見た初期中世陶器の地域相-須恵器系中世陶器を中心に-」『石  
川県立郷土資料館』第14号 p.86
- 注17 三宅敏之1972「経塚研究の現況と課題」『日本歴史』290
- 注18 山形県遊佐町教育委員会1993『遊佐町金俣経塚(木製経筒出土)-調査報告書』
- 注19 鎌田勉1997「岩手県内の経塚の検証2-経塚の遺構と墳墓の遺構-」『岩手考古学』第9号  
岩手考古学会
- 注20 西口圭介2009「近畿の中世墓」『日本の中世墓』高志書院
- 注21 森内秀造2011「兵庫県但馬地方を中心とした経塚の概観」『経塚考古学論攷』岩田書院
- 注22 村木二郎1998「近畿の経塚」『史林』81-2
- 注23 第19回両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流会編2001『中世土器と経塚・古墓』
- 注24 中世墓資料集成研究会2006『中世墓資料集成-近畿編(1)(2)-』 京都府関係は森島康雄、  
松尾史子、百瀬正恒、松本達也、橋本勝行の各氏が担当された
- 注25 国立歴史民俗博物館では全国の府県に参加を求め2001~2003の3年間に渡りデータベース作  
業を実施した。博物館には膨大な資料が蓄積されているので今後の経塚研究に資する面は大

きいと考えられる。この事業をきっかけに愛媛県を担当された岡田俊彦氏が「愛媛県内経塚  
覚書1」『紀要愛媛』第6号 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2006をまとめられるなど各地  
の研究の気運が盛り上がったように思われる。

注26 前掲注25のデータベースの京都府部分は今井稔子 高屋茂男 森島康雄各氏と杉原が当たっ  
たのでこのときのデータベースに両丹考古学研究会の『中世土器と経塚・古墓』集成を加え  
て時点修正すれば作成は可能だろうと思われる。

#### 参考文献

- 保坂三郎 1971『経塚論考』中央公論美術出版
- 石田茂作ほか 1977『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚 雄山閣出版
- 竹田聰洲編 1979『葬送墓制研究集成』第3巻 先祖供養 名著出版
- 三宅敏之 1983『経塚論攷』雄山閣出版
- 第13回埋蔵文化財研究会 1983『古代・中世の墳墓について』
- 吉岡康暢 1985「経容器から見た初期中世陶器の地域相—須恵器系中世陶器を中心に—」『石川県立  
郷土資料館』第14号
- 荻野繁春 1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会誌』第3号
- 荻野繁春 1986「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁』第14号
- 近藤滋 1989「滋賀 日野大谷遺跡」『仏教芸術』182号 特集中世の墳墓 毎日新聞社
- 宮田勝功・田坂仁 1989「三重 横尾墳墓群」『仏教芸術』182号 特集中世の墳墓 毎日新聞社 1
- 関秀夫 1990『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版
- 森内秀造 1992『博物館普及資料』第10集 兵庫の経塚 兵庫県立歴史博物館
- 杉山洋 1994『浄土への祈り 経塚が語る永遠の世界』雄山閣出版
- 弥栄町教育委員会・峰山町教育委員会 1998『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡 第2～5次発  
掘調査報告書』
- 奈良国立博物館 2000～2003『特別陳列 経塚出土陶磁展1～6』九州から東北まで全国で埋納さ  
れたやきものが展示された
- 大西稔子 2000『タイムカプセル—経塚 時空を越えて—』園部文化博物館
- 村上雅紀 2002「福井県における経塚・中世墳墓の様相」『朝日町文化財調査報告書Ⅱ』朝日町教育  
委員会
- 橋本勝行 2002「丹後の経塚と古墓」『太邇波考古』第18号 両丹考古学研究会
- 森島康雄 2003「京都府北部の経塚」国立歴史民俗博物館 経塚データベース研究会議
- 日本貿易陶磁研究会 2003 第24回研究集会資料集『経塚と陶磁器—その地域性』
- 小田富士雄ほか編 2008『経筒が語る中世の世界』思文閣出版
- 橋本勝行 2008『京丹後市の経塚』京丹後市立丹後古代の里資料館
- 狭川真一編 2009『日本の中世墓』高志書院
- 山川公見子 2011「経塚と如法経の関係」『経塚考古学論攷』岩田書院
- 村木二郎 2012「経塚と墓の複合遺跡のあり方」『季刊考古学』121号 雄山閣